

小學國語讀本

文部省

尋常科用

卷十



第十 稻むらの火

「これはたゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛ごへゑは家から出て來た。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したこと

ない無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には一向氣がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附けられてしまつた。風とは反對に波が沖へくと動いて、見る／＼海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れて來た。

「大變だ。津波^{つなみ}がやつて來るに違ひない。」と、五兵衛

は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみにやられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明たまつを持つて飛出して來た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」と、五兵衛はいきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ

薄 沒



又一つ、五兵衛は夢中^{むちゅう}で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つた

まゝ、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに沒して、あたりがだんく薄暗くなつて來た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘^{はやかね}をつき出した。

「火事だ。莊屋^{しやうや}さんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目には、それが蟻ありの歩みのやうに、もどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて來た。彼等は、すぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人々は、追々集つて來た。五兵衛は、後から後

から上つて来る老幼男女を一人々々數へた。集つて來た人々はもえてゐる稻むらと五兵衛の顔とを、代る／＼見くらべた。

其の時、五兵衛はカーぱいの聲で叫んだ。

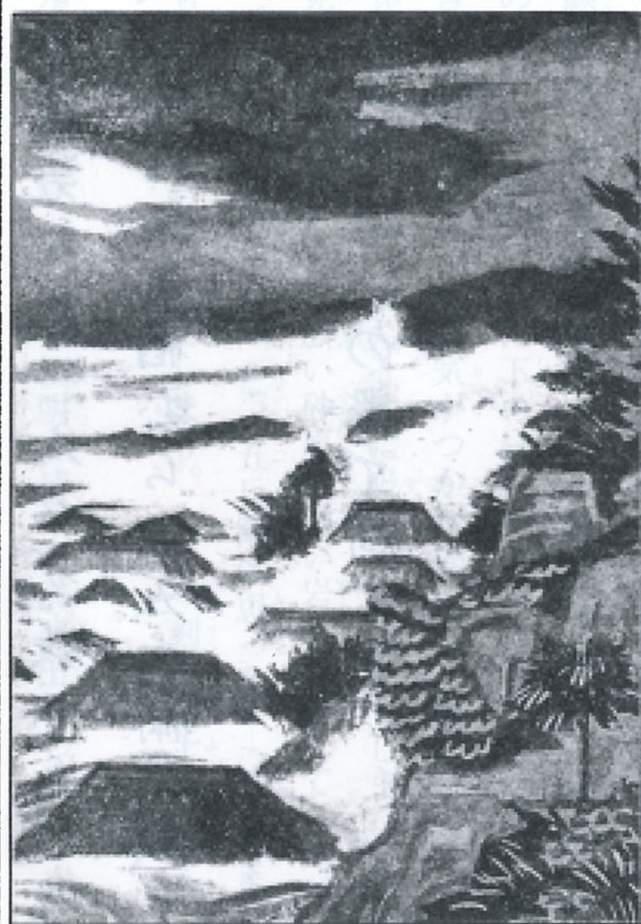
「見る。やつて來たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて來た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきとを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して來た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等



の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波に急ぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稻むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまゝ、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

稲むらの火

「これは、ただ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいというほどのものではなかった。しかし、長くゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りは、年をとった五兵衛にとっても、今まで経験したことのない不気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配そうに下の村を見下ろした。村では、豊年を祝う宵祭のしたくに夢中で、さっきの地震にはまったく気がつかないようである。

村から海に移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れてきた。

「大変だ。津波がやって来るに違いない。」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろともひとのみにやられてしまう。もう一刻も猶予（注1）は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出してきた。そこには、刈り取

つたばかりのたくさんいなの稲たばが積つんである。

「もつたないが、これで村中の命むらじゅういのちが救すくえるのだ。」

と五兵衛ごへえは、いきなりその稲むらのひとつに火ひを移うつした。風かぜにあおられて、火の手てがぱつとあがった。ひとつまたひとつ、五兵衛ごへえは夢中むちゅうで走はしった。こうして、自分の田ぶんたのすべての稲むらに火ひをつけてしまうと、松明たいまつを捨てた。まるで失神しっしんしたように、彼はそこに突つ立つたまま、沖おきのほうを眺ながめていた。

日はすでに沈しずんで、あたりがだんだん薄暗うすぐらくなってきた。稲むらの火ひは天てんをこがした。山寺やまでらでは、この火ひを見て早鐘はやかねをつきだした。

「火事かじだ。庄屋しょうやさんの家いえだ。」と、村の若いものむらわかのは、急いそいで山手やまてへかけ出だした。続いて、老人ろうじんも、女おんなも、子どもわかもの、若者わかもものの後あとを追おうようにかけ出だした。

高台たかだいから見下ろみおしている五兵衛ごへえの目めには、それが蟻ありの歩あゆみのように、もどかしく思おもわれた。やっと二十人にじゅうにん



ほどの若者^{わかもの}が、かけ上^あがって来た。彼^{かれ}らは、すぐ火^ひを消^けしにかかろうとする。五兵衛^{ごへえ}は大声^{おおこえ}で言^いった。

「ほおつておけ。大変^{たいへん}だ。村中^{むらじゅう}の人^{ひと}に来てもらうんだ。」

村中^{むらじゅう}の人^{ひと}は、次^{つぎ}から次^{つぎ}へと集^{あつ}まって来た。五兵衛^{ごへえ}は、後^{あと}から後^{あと}から上^{あが}つてくる老若男女^{ろうにやくなんによ}（注^{ちゅう}2）をひとりひとりと数^{かぞ}えた。集^{あつ}まって来た人々^{ひとびと}は、燃^もえている稲^{いな}むらと五兵衛^{ごへえ}の顔^{かお}とを、かわるがわる見^みくらべた。

そのとき、五兵衛^{ごへえ}は力^{ちから}いっぱいの声^{こえ}で叫^{さけ}んだ。

「見^みろ。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明^{うすあ}かりをすかして、五兵衛^{ごへえ}の指^{ゆび}さす方^{ほう}をそこにいる人々^{ひとびと}だれも見^みた。遠^とく海^{うみ}の端^{はし}に、細^{ほそ}く暗^{くら}い一筋^{ひとすじ}の線^{せん}が見^みえた。その線^{せん}はみるみる太^{ふと}くなった。広^{ひろ}くなった。非常^{ひじょう}な速^{はや}さで押^おし寄^よせて来た。

「津波^{つなみ}だ。」

と、誰^{だれ}かが叫^{さけ}んだ。海水^{かいすい}が、絶壁^{ぜつぺき}のように目^めの前^{まえ}に迫^{せま}ったと思^{おも}うと、山^{やま}がのしかかってきたような重^{おも}さ



百雷(注3)が一度に落ちたようなどろきをもつて、陸にぶつかった。人々は、
我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へ突進してきた水煙のほかは、一
時何も見えなかった。

人々は、自分らの村の上を荒れ狂って通る白く恐ろしい海を見た。二度三度、村
の上を海は進みまた退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかった。村人は、波にえぐり取られてあと
かたもなくなった村を、ただあつけにとられて見下ろしていた。

稲むらの火は、風にあおられてまた燃え上がり、夕やみに包まれたあたりを明る
くした。はじめて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつく、
無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまった。

(注1) 一刻も猶予

わずかの時間も遅らすこと

(注2) 老若男女

あらゆる人々

(注3) 百雷

多くのかみなり